リレーエッセイ

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

㊿

私のあこがれの山

住田町上有住　水野昭雄

五葉山は、私にとって登る山ではなく、遠くから眺める山だった。「俺もかわいそうな男だったな」と、自分ながらふと思うことがある。

父や母は体が弱かった。兄弟姉妹は男四人、女二人で、私の上に東京に出た長男、長女、次女が続き、私は二男であるが家を継ぐことになった。

高校卒業後の十八歳。確か昭和三十二年だったと思うが、農業だけでは生計を維持していくことができず、十二月から三月までの農閑期には、道路、水路、水道など土木作業をした。それでも地元では労働単価が安く、二年間ほど手間賃の高い東京へ出稼ぎに出ることとなった。

しかし、経済的に潤っても何かが足りなかった。「こんな生活スタイルではいけない」と養蚕、葉タバコ、水稲、酪農（搾乳）を組み合わせた農業経営を目指した。昭和四十七年にはイチゴを主軸とした農業経営に転換していった。

「農業が好きで、住田で農業をやりたいと言っている青年がいる。どこか受け入れてくれないか」――役場から問い合わせがあったのは昭和五十六年ごろだった。この時初めて原田青年と会うことになる。

「これからは農業の時代だ」と、安全・安心な食について自信ありげに彼は言う。私は原田君に畑を貸し、彼は大根作りに励んだ。上有住小台の我が家から山脈地の教員住宅までの二㌔の道のりを、夕食後歩いて帰るのが日課だった。

虫の鳴き声、カエルの声、気仙川のせせらぎの音、川を渡る風…そのすべてがいいと彼は言う。原田君と過ごした三年間は、私の価値観を揺さぶり続けた時間でもあった。

原田君は「虫は虫なりの生き方がある。野菜に付いた虫はとってやり、野菜から離れた場所に移す」と言い、実際そのように実践していた。教員住宅への帰り道、耳にし、目にした自然の営みは、きっと病弱な父も母も、そして祖父母も目にしていた風景であっただろう。

田んぼでの農作業の合間に五葉山の稜線を見ていたのかも知れない。いま自分もあの山の稜線を見ている。「いつか行ってみたい。どんな山なのだろうか」。冬になると決まって注目するのは初雪をいただいた五葉山である。

家を継ぎ、家計を背負い、歯を食いしばって生きてきた。行きたくても日々の農作業が優先する。五葉山は私にとって、行きたくても行けないあこがれの山であった。背負ってきたのは家業だけではない。この地に生き抜いていくことの苦しさや悲しさである。けっして逃れることのない現実との対峙である。

平成元年七月ようやく念願の五葉山に登ることになった。ちょうど五十歳になっていた。「あこがれ」から解き放たれ、「現実」の五葉山に出合えたのだ。この登山がきっかけで、早池峰山、栗駒山、秋田駒ケ岳、岩手山に登ることになり、尾瀬ケ原までも足を延ばした。

原田君の自然観に感化され、五葉山の自然を大切にしたいと思うことが三つある。一つめは豊かな森に人の手を加えてはいけないこと。木を切るにしても人の都合で切ってしまってはならないことだ。

二つめは森林は人をくつろがせ、リラックスさせる。森は気分転換させる場所でもあり、いつまでも大切にしたいことだ。三つめは五葉山の頂上部、日枝神社の下方にある水源を大切にすることだ。貴重な森の恵みでもある。

宮城県角田市で畑を耕しながら塾の先生をしている原田君。周りにある豊かな自然の素晴らしさを気づかせ、自然との「共生」の意味も教えてくれた。

遠く仰ぎ見る五葉山の稜線に、いまはもういない祖父母や父母がそれぞれ背負って生きてきた日々の営為を、いま愛おしさを持って思い浮かべている。

田んぼでの農作業の合間に見る五葉山の稜線。祖父母や父母を思い浮かべることがある

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、七十一歳。気仙地方葉たばこ生産振興会長。すみた清流米生産組合前組合長。岩手県指導農業士を六十五歳で定年。